

インフルエンザが早いペースで流行の兆し 学級閉鎖や休校の学校も



2008年のインフルエンザが、例年に比べ早いペースで流行するとみられている。

東京・江戸川区にある「みやのこどもクリニック」には、休日にもかかわらずインフルエンザの予防接種を受けるため、およそ150人の子どもの予約が入っていた。

2008年のインフルエンザは、例年より早いペースで流行の兆しを見せている。

厚生労働省によると、11月8日までの2週間で、全国の保育所・幼稚園や小中学校の24の施設で、学級閉鎖や学年閉鎖、休校になった。みやのこどもクリニックの宮野孝一院長は「(予防接種を受ける人の数は例年より)20%~30%は増えていると思います。特に大人が、お子さんと一緒に注射したい」と語った。

国立感染症研究所の調査では、鳥取県でタミフルが効かない耐性ウイルスが報告された。

さらに、鳥インフルエンザが変形して発生する新型インフルエンザが懸念されている。

大流行すれば、世界中で死者7,400万人、日本でも最悪64万人が死亡すると推計されている。

京都産業大学の大概公一教授は「別のタイプの新型インフルエンザウイルスが出現した場合には、(ワクチンをつくるのに)6カ月程度はどうしてもかかる」と語った。

一方、千葉・浦安市では、対策にいち早く取り組んでいる。

浦安市では2008年度、およそ1,300万円を新型インフルエンザの対策費に充てている。

備蓄倉庫にはマスクが3万5,000枚、手袋が5万枚、防護衣などが蓄えられていた。

浦安市には、国内外から年間2,600万人もの観光客が訪れる東京ディズニーリゾートがあり、発生してからでは遅すぎると、事前の対策に力を入れているという。

浦安市の阿部金二危機管理監は「浦安市の特性として、まず地域内に大規模集客施設があります。日本で最初に発症する可能性は、ほかの市町村に比べれば高い」と語った。

こうした中、インフルエンザに対抗する新型マスクが誕生した。

このマスクには、ダチョウの卵が利用されている。

京都府立大学大学院の塚本康浩教授は「ダチョウの卵黄から鳥インフルエンザの1つ、非常に毒性の強いH5N1のウイルスに対する抗体をつくりました」と語った。

ダチョウに新型インフルエンザなどの抗原を注射すると、ダチョウの体内に抗体が作られるが、今回、それを卵の黄身から取り出すことに成功した。

これをマスクに利用したという。

塚本教授は「マスクのフィルターを抗体を薄めた液体につけます」と語った。

このマスクに組み込んだ抗体とウイルスが反応、ウイルスが弱まり感染を防げるという。

塚本教授は「2週間くらいで、黄身の中から大量の抗体が作れる。新型インフルエンザに対しても、対応できるかなと期待している」と語った。